軍人と基督教

花村介石 序
島貫兵太夫 述

東京救世社發兌

特61
270

軍人と基督教

柏村介石述
島貫兵太夫序

東京救世社發兌

序

島貫君一書を著し題して「軍人と基督教」と云ふ、時勢は激するものあるが如し、夫れ我國は於て基督教の誤解せらるゝや久し、或い教育勅語に反すと謂ひ、或は國家精神に悖ると謂ひ、或は忠君愛國の心なきものと謂ふ、皆々然らざるはなかりき、こゝを以て學校は於ても軍隊に於ても基督教徒の逆遇せらるゝ事甚しく咄々、怪事の出來事其

幾數あるを知らざりき、然るを近時は及んで俄然一變し來りたるものは基督教と國家とに於ける世人が觀念之れありとす、聞く今や軍隊に於てゝ普く聖書の頒布を許し、加ふるに手續を經る時には、公然說教をも試み得るの運びに至りしとぞ、又教育界に於ても文學界は於ても漸く人の精神界に注目し始むると同時に又基督教にも大注目を惹起し來らんとす、國家の慶事何物か之は

加かんや、吾人基督教徒たるもの豈奮勵せざるべけんや、蓋し吾人は世に歡迎せらるゝを以て滿足するものはあらず、尙々願ふところは天道人道の大道に由り、上を敬し下を愛し、國を思ひ義は勇み、一身ゝ仰俯天地に恥ぢず、一家は骨肉の情悖らず、一國は屹然として宇內の間に立ち何れの國よりも苟も侮辱を蒙るとのなき富强二無の一大帝國を形成せしめずんは止まずとの精神

を貫き行かんのみ、此書一封片ゝ過ぎずと雖ども、同ゞく我党人士の草するもの、意亦蓋し此に在るべし、新著を祝し併せて余輩平生の氣懷を述ぶ。

明治廿八年五月廿六日

容瞭堂主人識

この小冊子は軍人と基督教の關係のあらましを書きつゞりたるものゝして軍人諸君が基督教を調べて見やうと云ふ精神を起す事ゝ些かにても參考とならば編者の滿足する處で御座ります。基督教本論は基督教の牧師教師方ゝ就て御質問なさる事を御勸め致します。

五月初旬

東京　編者識

軍人と基督教　目次

第一章　軍人と基督教と縁近くなりました
(一)日本軍は文明的の戰爭を致しました
(二)此の精神の起りは何でせうか
第二章　そこで軍人と基督教の關係を述べませう
(一)基督教信者におつても柔弱におりません
(二)又忠君愛國の精神が弱くなりません
第三章　基督教と軍人に必要であります
(一)戰爭の本義が知れます
(二)死について明かおる悟を開かれます
(三)膽力家におられます

第一章　軍人と基督教と縁近くおりました

此度の日清戰爭によりて基督教と軍人との關係が近くおりました。先つ日本の天軍が義に拔りて兵を動かし無道の清軍を撃ち懲らし飽までも其無道を惡みしも戰は清軍と戰ふものにして一個々の清民と戰ふものにあらず。この故に苟も戰鬪力なきものは敵と雖ども一視同仁の博愛主義を以て恕るに彼等を待遇し少しも慘酷なる野蠻人がするか如き事はありませんでした。殊に手傷を負ふたるものや病の爲めにおやむ病兵おどに對しては敵味方の隔てを立てずして看護をなすを忘らずしてありました。然るにかの支那軍にいたはり之を勵まし慰めて出來る丈の

のおす所を見まするに其仕方は全く日本軍のおす處とうらはらです、即ち彼は日本人とさへ見れば女子も子供も下男も下女も何でもうでも見當り次第、捕へつけて誠に慘酷に鼻をきるやら又は不埒の事をするやらまるで我が日本軍のおす事と正反對です、甚しきに至りましては戰地にある赤十字社の病院を襲ふて病兵に乱暴狼藉の振舞をなしましたを見れば、とても此の文明開化の十九世紀にある軍隊とは思はれません、中央亞弗利加邊にぶらつき廻る極野蠻の軍隊のやうに思はれます、こゝが支那軍の野蠻な所であります、日本軍は全く支那軍とはちがいいかにも正義の爲に戰ふ軍兵の如く又文明世界の軍隊の

如くにして何も不義なる事は小兒にも柔弱なる女子にも加へません、こゝが日本軍のエライ處であり升、日本軍は假令野蠻なる支那軍を相手にして戰爭をする事とは云へ今や世界の多くの人が見物して居る、舞臺にあがつて戰爭をしてをるのでありますから、支那軍が如何に非道禽獸の樣な振舞をしても日本軍は飽までも文明的の戰爭を致して居り升、大山大將も告文を發して此点に付て部下の將校方より一兵卒に至るまで懇々と説明なされたる事がありましたを見ても、日本軍は飽までも文明的の戰爭をするので野蠻的の戰爭をする積りは聊かもありませんでしたと云ふ事は明かに知れますのであり升、

(一)日本軍は文明的の戰爭を致しました

なにが日本軍が文明的の戰爭をしたと申すのですか其勇氣のある事、例へは一度戰場に向へば決して退かずと云ふが如き事ですが、此れは云ふまでもなき事で日本軍人の數百千年の其昔よりある事で今更之を喋々するは却て愚な事で御座り升、されバ其規律の正肅ある事、其行進の神出鬼沒なる事でありましか、もとよりあんな事も文明的の軍隊の事で御座りませうが、殊更に日本軍が文明的であると云ふのは人間を重んじた事で御座ります、勿論戰ふべき時は戰へ升、殺すべき時は十分に力を入れて殺し升、一刀兩斷、短刀直入、勇猛突進、死あるを知りて、生あるを期せませんけれども殺すべからざる事は一ッの小さな猫でも殺しません、近頃或る一名の士官が三才にある支那人の孤兒を抱きながら戰ひの指麾をしたといふ事でありますが、日本軍は人の生命を重んじますから決して殺そべからざるものは此のたよわき子供でも蹈殺す樣な事は致しません、戰爭して支那の軍兵を殺すも實に止むを得ずして殺すので殺さねばならぬ譯あればこそ殺すのであり升。それでありますから苟も戰ひに堪へざる兵卒は敵味方の區別なく、丁寧親切に之を看護して之を癒してやる爲に赤十字社の病院があるのであり升。此の精神で此の美しき事を戰爭に於て實行したのは、手短かに云へば文明的の戰爭と云ふので西

洋人なども日本人のエライ事を讃めたてたのであり升。もとより文明的の戰爭には器械力を器械的に熟錬に使用して其法則に從つて好結果を得る事も文明的の戰爭であります、けれども唯此器械的の事斗りでは決して文明的の戰爭とは申されません、是非とも先きに申上げた通りの精神即ち人間を重んじ、人間の幸福の爲めに此の精神を實行する事がおければ文明的の戰爭をしたとは云はれません此度日本の軍隊は立派にそれを實行致しましたから、日本軍は文明的の軍隊、日本軍は文明的の戰爭をしたと申されますのです、又文明的の戰爭をしたと自信して居るので御座り升。唯器械的の事斗りして而して日本軍は文明的の戰爭をしたと云つて世界の人々を欺す積りでおく全く文明的の戰爭をしたと申そのであり升。昔し我國の武士は隨分勇氣がありました、又軍畧にも富んで居りましたが、それでもあの人々は文明的の戰爭をしたとは申されません、例へて申せば、八幡太郎義家公の如きは智も勇も仁もあつた大將でありましたけれども、まだ文明的の戰爭をした大將とは申されません、なぜと申せば八幡公はあれ程の名將ではありましたが、恐らくは未だ人間の重んずべき人の生命の尊ぶべき、又降參せしもの即ち已に戰鬪力を失ひしものは、慘酷に取扱ふ筈でないと云ふ事を知りませんでした、降參せしものは無慘に取扱ふべき筈はありません、如何と

あれば假令へ敵と雖とも人であり升。古の聖人も云ひけるが如く四海同胞であり升。同胞である且つは戰の目的は人生の幸福の爲にあるものにしてゐれさへ達すれば、滿足な筈にして降服せゝ敵を慘酷に取扱ふ筈はないのです、然るに八幡公は色々の譯合もありましたけれども降人清原の武衡の十分降參の誠意を顯はゝ十分戰はぬ旨我証せゝも遂に無慘にも之を殺してゝまいました、此れ昔時にありては人間一人の生命でも實に尊ふべきものにゝて出來る丈慘酷の所爲あるべからざる事を知らざりしが故に敵を如何に刑せしも別に世の批難もあければ且つは世人もそれで敢て非道にあらずと思ひしが爲めで、さすが名將もそこまで氣が附かなかつたのです、此類の事は澤山ありまして、獨り八幡公斗りではありません、八幡公はさすがに昔の智仁勇備兼の名將ときこゆるが故に私は今之を例としたのであり升。此を我國の昔時は文明的の戰爭せざりし証據ではありませんか、且つ又假令へ如何に其勇と智と仁とに於てすぐれたりとて人間の價値の高き事、人の生命の尊ぶべき事を知りて其精神を實行せしにあらざれば文明的の戰爭でないと云ふ事は分りませう。

(二)此の精神の起原は何でありませか。

文明的の戰爭と稱すべきものに欠くべからざる器械の進歩は誰により何處から持て來られたので御座りませか。

或人々はそれは基督信徒の賜であると云ひ升。けれども之れは餘り極端です、尤も西洋の有名なる人は大概基督信徒で有ますから基督信者の賜であると申しても別に差支はありますまいが、能く〳〵西洋の人々の有樣を考へ見ますれば西洋の人々は元來進歩の氣性が盛でありますから、此んな發明が出來たのであると思へます「キリスト」敎を信せずとも、此んな發明は出來ぬ筈はありません、併し其次に文明的の戰爭に欠くべからざる此の博愛慈善の主義い何處より來ましたか、是れは疑ひもなく「キリスト」敎から來たものでそ、現に彼のクリミヤの戰爭の時に身を殺して敵味方の區別なく之を愛して丁寧に看護して、兵卒の親友となり今日に至りて赤十字社とあれる此社の發起人なるナイテンゲール女史は何人でしたか、是れい英國の熱心なるキリスト信者でありました。女史は何物に動かされて此の危險多き事業に身を投じましたが、好奇の爲でも名譽の爲でもなく全くキリスト敎主義の博愛仁慈四海同胞神の前には敵も味方も神の愛し玉ふ神の子供であると云ふ聖書の敎が機動となりて此事業に身を投ぜたのであり升。それより軍人社界にい痛く感動を與へ成程人間は同胞である戰場に於ては主義の爭であるから血をも流さねばならぬ事であるけれども戰の外は唯同胞である敵味方の區別ある筈はないと云ふ事が誰を彼の區別なく受け容れらるゝ樣

になりまして、これは誠に其筈である戰爭と云ふものは人生の幸福の爲にするもので、少しでも私慾的にやる筈のものではない、唯義に投れる主義の爭であるから慘酷なる事無理なる事は少しでもある樣では野蠻的の戰爭で恰も禽獸が食物をねろうて相はむが如きものてある文明的の戰爭は義によるべし、人間を重んずべし人命を尊ぶべき筈であると云ふ事は世界の輿論によつて此の精神により て戰爭をせざる支那の如きい野蠻的の戰爭である世界より擯斥せらるゝ樣になつたのであり升。此度日本の軍隊が此精神で飽までも文明的の戰爭をやつたと云ふ事は實に軍人か我か「キリスト」教に近かついて來て「キリスト」教と緣か深くなり始めたのであり升。そこで基督教徒たる我々は軍人とキリスト教との關係を說かねばならぬ事になつて參りました。

況んや今度大本營に於ても軍隊に於ても「キリスト」教も必要であると認められ我邦「キリスト」教徒か第一軍、第二軍に向つて發する慰問使の從軍を許可せられ諸氏い出發してそれ〳〵往くべき處に往かれたる今日に於てをや。

況んや近衞及び第一師團の如きはこれまで聖書を入るゝ事さへ許可せられざりしが今度は、キリスト」教も軍人に必要ありと認められ基督教の經文なる聖書を入るゝ事を許可せられ某外人の如きと一万八千部の聖書を同師團に寄

附したるに於てをや。

嗚呼我「キリスト」教と軍人の關係は近くなり來れり、軍人とキリスト教との縁が近く成りました。

第二章　そこで軍人と基督教との關係を述べませう

扨て何から御話し申し上げませうか、凡てもの事を知らんとせば先つ第一に「先、入、主」とて頭からかうであるあゝであると調べもせずしてきめてをる事のない樣にしなければならぬ事であり升。若しも人々は初めから「かうである」「あであるる」と獨りで極めてをいて其の事を十分に心得てをる人の云ふ事をきゝぬ時い、決してもの事は分るものでないと昔の賢しとき人々も申されました、されば軍人諸君のキリスト教と軍人との關りあいを知らんとする時にも「先入主」と云ふ事あつては誠に其關係を知る事は六ヶ敷かと思はれましから、些か從來人々が基督教について間違つて思ふて居つた事を先づ御話し申す事と致しませう。

(一)基督信者になつても柔弱になりません

今まで人々の間違つて思つて居た第一の事は基督信者にあると弱くなると云ふ事で御座り升。成程一寸見ればさう見えるやも知れませんが、併しながら決して〳〵そんな事はありません元來弱いとか強いとか云ふ事は何を云ふのでせうか其心の樣を申す事で御座りませんか、必ずや其外形の荒々しき事で御座りますまい、若し「たゞ外形(うはべ)の荒々し

き事即ち言葉使用の荒々しき事や歩方の音高ん事や或は虎を手打にし大河を徒渉して死ぬる事をも顧みぬ事などを強い人と申せばワシントンやゴルドンや徳川家康などは至極弱い人と申さねばありますまい併しながら誰もワシントンや徳川家康の様な人をば決して弱い人とは申しませんで却て智勇兼備の名将と尊んで軍人ならば先づ此等の人を目當てとして進みませう西郷隆盛すらもワシントンを慕つて居つたと云ひますからワシントンの様な人は餘程エライ軍人であつたにちがいがないと存じます。されば強い軍人とは決して其外形の強い事でなく其精神の強い事であります。精神の強い人は決して外形に於て荒々しいものでありませんが却て其言葉使用や人に接する等の事には殊に親切にして一度此人に接それば春風よ吹かれたるが如く必柔和になつて來てとても離るゝ事が出來なくなるものであり升。されば勇將の下には弱卒がないであり升。勿論人間は誰でも弱いものでありますけれども勇將の下に率ゐらるゝ兵は勇將の其智仁勇よ感化せられて其勇將に似たものとなるからでありませう、然るに勇將と云ふものは獨り勇斗りあつてかくまでよ兵卒を已にひきつけたかと云ふよそうでありません、勇は勇よちがいはあけれども其勇い外よ顯はれたる虚勇よあらずして精神の底よひそみ居る眞正の勇で其眞正の勇と云ふものは

外形ゑ於てハ誠ゑ靜かゑ小兒も「おトさん」と云つて抱クれん事を喜ぶまでゑおだやクなのであり升。恰度をだやかある鳩の如く又鯉の如きものであり升。併ーこの眞正の勇者の心の底は噴火山の底の如く常ゑ燃ゑて居りまして如何なる岩石でも融解てしーまふ程強く且つ又猛き獅子の如きものであり升。故にをだやかなる時ハをだやかだが一旦其勇を顯さねばあらぬ時が來ると實ゑ非常であり升恰度獅子がたけり狂ふて山岳の間を走れば山岳爲にふるふ樣な有樣であり升。實ゑ眞正の勇者ハ外面に於ては却てをだやかなる事鳩の如く其一旦ふるふゑ及んでは獅子のあれたつさるが如きものであり升。何時でも強ゑ想ゑ

肩などをはつて往いて居るものは必ずしも眞正の強い人でありません、眞正の勇者ほどをとおーいのはありません臆病ものに限りていかにもいうめしく肩をはり聲を大きくして人をおどすものであり升。併し「サー」と云ふ眞劍の勝負と云ふ時に腰を拔ゥすものであり升。

人が基督教を信ずれば段々賢こい人にありますゥら外形斗り威張つた處がつまらない、虛勢おどは張るものでないと云ふ事が解つて來ますから決ーて肩おどをそびやかーてエラ想に人に見せる樣な事は致しません、人を欺す事が出來ても神を欺ます事は出來ぬと云ふを知りて參りますから、ろれ故に今まで肩をろびやかして威張つて居た自分

免許の豪傑や唯聲丈を大きくして、人ををどしたる軍人も極をとおーくなつて丁寧なる言葉を使用ふ樣になり、人々に交際するにも己のエライと云ふ事を示す樣な卑しき心がなくなりて唯愛と親切を以て交る樣にあり升。そこで唯外形を見る淺墓なる人々は「あれは耶蘇になつてゐら臆病になつた」とか「女の樣に弱くなつたとか」と誤つたる評判を致す樣になり一人が虛を傳ふれば萬人も之に和し遂に天下の人々は皆「耶蘇になれば弱くなるから軍人などは決して耶蘇になるべきものでない」と云ふ事に極つたのであり升。併し耶蘇になつた人の方まなると「嗚呼今までは罪の生活をなして來た虛言斗りでかためて來た、人間の強い處は心の中にあるので決して外形にあるものでない、王陽明も云つた通り山中の賊を征伐するはいと容易し、けれども心中の賊を擊つ事は餘程六ケ敷事のである、併しこの六ケ敷と云つて人々が閉口して居る處に勝つてこそ眞正の勇者なれ、いで余は即ち今より僞を棄てゝ眞を取ろう即ち外形を去りて精神に立返ろう」と云ふて實に靜ゝと落着れて大人らしくなつて來るのであり升。世の中の人々の思ふ方は本統でせうか、將又此耶蘇になつた人の考は正しいのでありませうか、これゝ耶蘇になつた人の考が正いと云ふ事は固より明かな事であり升。されば耶蘇敎を信ずたればとて決して軍人は弱くなりません、却ていろにも眞正の

勇者におつて如何なる事にてもおすべき事はなす樣におり死するも生きるも己の私にする事なく唯神命を待つて決する樣におり升。此の神命を第一に重んする精神がありますから決して彼の己の腕力斗りを賴んで事をする人よりは遙に大おる事を致し升。偖て其次に世の人々か誤つて考へて居る事は基督教徒になれば天皇陛下に忠義でおくなり、又國家を愛さなくおると云ふ事でありますが却て基督教徒におると忠臣におりまそ。

(二)忠君愛國の精神が強くおり升

又世の中の人々が間違つて思ふて居る事が御座り升。これは私共が度々きく事であり升。又おあた方もきゝおさる事て御座りませう、それは別の事でも御座りません、即ち耶蘇になると忠君愛國の精神が減ずると云ふ事て御座り升。ことによると或人おどゝ耶蘇におると忠君愛國の精神がおくなると申し升。これゝ實に間違た談で丸で耶蘇教と云ふものを知らぬ人々の御談しで御座ります。若しも誠にそんな事がありますおらば私共ゝ皆樣より何と云はれても御答辨致す事ゝ出來ませんから默つて居り升。けれどもそんな事は決して一分一厘もおいのですから、默つて居られずしてそんな事はありませんと云ふ事をいさゝか御談し致し度く思ひ升。若しもそんな事が實際におる事ならば、今日我が日本には隨分眼のあいて居る學者も

又忠君愛國の精神の強い方も澤山ありますから、どうに此の耶蘇を此の日本の國外に放逐してしまいました筈であります、けれども之を國外に放逐しあい斗りてなく、却て是れは誠によき宗教であるこの宗教でなければ我が日本の宗教にするに足らぬ、この宗教でなければ我日本の國民の元氣を旺盛にし且つは安心立命、殘與へ人間の蹈むべき道を教ゆる事が出來ぬと申して己が確く之を信ぜて日曜毎に會堂に往つて牧師より說教をきくのみならず、又人々をも誘ひ往きまそ、そのみならず、或い自分で或い傳道者を頼んで未だ此の教を知らぬ人々に語つて居ります、そのみならず莫大の金をも寄附して日本國斗りでなく朝鮮國の

樣な國々にまでこれを弘めやうとしてをります。

こをはどんな譯でありませう、これ等の學者やこれ等の政治家有志家などは、矢張り世の中のあたりまいの人々の通り耶蘇教は忠君愛國の精神をなくする教で、國家の害になる教であると思つて居た人々でありましたが、然るに今はこの通り耶蘇教に熱心にあつたのはどんな譯でありませうか、これいどうも不思議な事でありませんか。外國人から金でも貰ふ爲でありますか、否なら耶蘇教を信ずれば却て金を外國の爲に出しますけれども、外國人から金などは決して貰ふ筈はありません。然らば何か不思議な甘い事でも教へられて、何か人に云ふ事が出來ない面白き事でも

あるのですか、否あ〳〵耶蘇きりすたんと云へば昔は何か不思議な事を行つて、人民を迷はしたと云ふ事はきいてをりますが、人々は今の基督教もそんなものと心得て、何か手品でも使ふものと思ふ、極く開化せぬ人も御座ります。けれどもそんな事い自分の見えぬ、眼光て判斷した事で決してある筈のものでないのです。此の明かに治まる御代、十九世紀の學問の開けた、代にどうしてそんな、馬鹿らしい事かある事は出來ませうか。我國の人々が神樣と思つて居た雷光も今は學問の御蔭で自由自在に電信や電話や電氣車となりて、私共に使はれて居るではありませんか。どうして堂々たる一大の宗教なる基督教が、何か不思議な事あ

ど残して此の開ける時代に開けた人々を胡魔化して高聲(たかごえ)して說教あどをして何時まても化けの面を顯さずーて居られませうか。如何に基督教の奥の奥まで調べて見ても人をだますやうな事はないから、此の開けた時代に存在する事が出來るので御座り升。さらばどう云ふ譯でさきにて基督教は忠君愛國の精神をなくするものであると、思つは基督教に反對した愛國者や目のあいてをる學者などが。今は却て熱心なる「キリスト」教信者とあつたで御座りませうか。

誠に六ケ敷理窟も何もありません、唯此の熱心なる愛國者目のあいてをる學者あどが。「近頃は段々我國にも「キリや

スト教が流行してきて澤山の人々も信ずる樣になつてきたが一体キリスト教は國家と如何(どんな)關係があるものか知らん。兎ゝ角に研べて見おゝ中は何んと云ふことも出來ぬ故に、先づ研べて見樣と云ふ心より段々研べて見ると先きに思つて居た事は凡て誤で却て基督教と云ふものは尊き教で神ゝ仕ふるの道、人を愛するの道、國を愛するの道、君に仕ふる事の道おどを正しく教ゆるもの即ち一言に云へば人間の義正に蹈むべき道を教ゆる立派なる教である」と云ふことが了解(わかつ)たので今は熱心ある信者とおりたのであり升。此の最も熱心に國を愛する愛國者や、事物の眞僞を判斷する學者が國家に害おゝと認めたは即ち「キリスト」教の

忠君愛國の精神を減らすの、又は全くおくするのと云ふ氣遣のなき証據の一つと見ても、敢て無理ではないのではありませんか。

我國の憲法が達布せられても尙ほ此の「キリスト」教が自由に國中に宣傳する事を許されてあるのは即ち此の「キリスト」教なるものは國家の治安を害せず、人民の幸福を害す。忠君愛國の精神を減らすなどの心配がおいうら許してあるのでありませう。我ゝ國の人々は何宗教を奉ずるも全く自由であると憲法に定められてありますけれども國家の治安、人民の幸福を害する樣な宗教は決して許されてをらるゝ筈はおいのです。若し「キリスト」教が我國國家治安

の中心とも云ふべき忠君愛國の精神を害するものならば政府に於ても直ちに此の教の弘がる事を防き宣教師を國外に放逐し信者を説諭して止めさせませう。しかるゑ政府では少しもそんな心配もせずして、却て近頃あゞは師團に「バイブル」等を入るゝ事を許可したと云ふのは、「キリスト」教は決して、忠君愛國の精神を減さぬと云ふ証據の一ッとするも敢て無理な事でもありまそまい。もう一ッ御話し致たい事は、「キリスト」信者は果して實に不忠のもの或は我國を愛さぬものでありませうかと云ふ事です、一体君に忠を盡し又國を愛すと云ふ事はどんな事ですか　天皇陛下の事を誠心より愛し奉り　天皇陛下の爲ならば何事でもする事で御座りませう、又國を愛すると云ふも之れと同じ事で國家の爲にあるならば此の身も靈も盡く献げんとする事で御座りませう、若し果してそうあらば「キリスト」信者は他人にまさりて其心深くあります。此度の日清戰爭の爲にも「キリスト」信者は一般國民として盡した斗りでなく又日本の「キリスト」信者として十分に盡したのでありませんか、モー一般の國民として國家に對せる務を果せる事を以て忠君愛國と云はゞ「キリスト」信者も忠君愛國の人で御座ります。其上に盡した事を思へば更に其精神の深い事が十分ゑ分つて參りませう。能々其内部實際の有樣を取調べずして「キリスト」教信者は忠君愛國の精神がないと云

ぶのは少し無理でありませんか、實際の事を申せば、「キリスト」教徒は前申しました通りであります。「キリスト」教徒は決して不忠あものでもあく、又國を愛せぬでも御座りません、私共か實際に見た處では、「キリスト」信徒は却て忠君愛國の精神が強くあり升。さきよは餘り熱心に君を思はかつた人も又餘り熱心に國を思はなりつた人も信者になつてから一層強く國家を思ふ樣になつた事實を見升。何故に信者になると忠君愛國の精神か強くなるのでありますか。それには色々譯があり升。先ッ第一に信者になると神の御意と云ふ事を尊びて之に從ふ事を致し升。今私共か奉じ居る　天皇陛下の御意に從ひ奉る事は神意に

かなつて居るかどうかと能く考へて見ると實に　天皇陛下に從ふ事は神樣の御意であると云ふ事が分りますから今まで餘り忠義の志深からざりし人々も、深くありてまへり、どうしても　天皇陛下の爲に身命を盡さずして居る事が出來ぬ樣になつて參り升。その次には矢張愛國と云ふ事で御座り升、これも此國に神が生るゝ事を許し玉へしを感せし上いどうしても此國を愛さねばならぬ樣になつて參り升。凡そ信者は神意を重んずる故に人をも愛し君にも忠義を盡し國をも愛す萬づの正しき事は勇んで之をなそ樣にあつて參り升。どうも唯信者によると神の意を重んずる故に、善き人になると斗りきけば、甚分り難き樣な事

でありますけれども、實際どう云ふ譯かい知らねども信者になると此の神の意を重んずると云ふ心は強くなつて參り升。實際あるものであると云ふ事い信者にあつて見あい人には分り兼ぬるのも知れませんが、兎に角に實際信者になつて見るのは一番分り易い事で御座りませう。

第四章　基督教は軍人に必要であり升

偖て前數章に於ては我邦に於ても段々基督教と軍人との關係が近くなつて來たから、此時に當て是非諸君に「キリスト」教を說かねばならぬ譯合を述べ次に世の人々が基督教と云へば頭から耶蘇と云つて賤んで色々間違つて居る箇條をあげて細々と御話し致しましたが此章に於ては進んで「キリスト」教は實際軍人に必要なもので軍人たるものは之を信ぜねばならぬ事を御話し致さうと思升。

先づ軍人は何をするのが其職務でありますか、唯戰爭をして百万の强敵をも、ものゝ數ともせず、縱横無盡にきり敗つて大勝を得るのが其職務でありますかそうです、それは職務に違いございますまい、しかし何の爲に私共は戰爭を致しますか、これは面白いからでは御座りますまい、武人の腑肉が肥えて堪まらないからするのでもありますまい。唯しなければならぬ事あつてするのでありませう、何故でそう、これは義の爲にするのであり升。これは人間の幸福の爲にするのであり升。敵を殺すも實は止むを得ずしてす

るので好んでそるのではありません、敵が義に背いた事をするから征伐するれであり升。若しそのまゝにしてをけば敵の爲にも味方の爲にもならないのでありますから、之を伐ち懲らすのであり升。そのまゝにしてをけば人類の幸福を害し人間の進歩を害するらして之を伐つので面白半分の好奇心から伐つのでありません。孔明が涙をふるつて馬稷を斬るとは眞に戰爭の義を說明したものであります。

今度の戰爭と申せば日軍は實に正しいのであり升。支那軍は征伐せられねばならぬのであり升。清國は不當にも朝鮮の獨立を認めず飽までも之を奴隸にせんとしたる事

や又は天津條約ゑ背いた事などをしたのみならず、又飽までも頑固にして彼か例の傲慢無禮を以て我が日本に接し野蠻固陋の風を以て我が東洋の進歩を害せんとしたるが如きは、即ち此れ清國の爲にも又朝鮮の爲にも日本の爲にもひいては世界の爲にも大害を與ふる事にありますから人類の幸福を害する事にありまそ。この故に我日本國は之を飽までも伐たねばありません、之を征伐するのは即ち義を守る事であり升。之を征伐する事は東洋數億万の民人の爲であり升。つまり世界の爲であり升。人類の幸福の爲であり升。それ故ゑ是非とも征伐せねばならぬ事であり升。我が　天皇陛下の赫怒兵を發して清國を伐ち玉

ふたる事と誠に畏しこくも又有難き事であり升。戰爭は是非とも此の動機によつて始められねばなりません。即ち戰の爲に止むを得ず干戈を動かす事でなければ正當の戰爭と申されません、されば軍人たるものも人を中心として思はざるべからざる事と考へられます、人の爲めゝ人の幸福の爲に萬事を考へねばならぬ事と思はれます、又義の爲めに動き義の爲に死するの覺悟なければならぬ事と存ます。此故に軍人たるものは上大將より下一兵卒に至るまで義を重んず人間を尊ぶの誠心をくんばあらずと思ひ升。何の爲に今我々は戰へ居るかも知らずして戰ひ居る兵卒は何となく力ありません。我は義の爲に戰ひ居るもの我は人間の爲に戰爭するものと知りて居る上ゝ大將の命令を能く遵奉せば一層正しく且つ強き戰爭をなし得る事と思はれます、基督教は能く人間の尊ぶべき譯合や、道の尊ぶべき譯合などを確かに明かに知らしむるものであります、平常此教を學んで居る人は必ず義理分明にして情理明確であります正しく公平に萬事を處理することが出來升。

次ゝ御談し致したき事は「死する事」に付てゞあり升。死と云ふ事と軍人とは隨分密着の關係があるのであり升。それ故に昔より名將勇卒多くは死する事に付て色々の悟を開いてをり升。死する事は「我がもときし家に歸る事」と同

ト事であると云つて居り升、實際死と軍人とは大關係のあるものであり升。

軍人のエタイ處は其能く義を知り仁を行ふのみあらず戰に望んでも勇しく戰ひ百万の强敵を見ても之を睨みうへそが如き猛意ある處と思はれ升。古の大將は智と仁とありしのみならず之れゝ加へて實に非常ある勇氣がありました大概の名將と稱せられ歷史に殘つたほどの人は大概は智仁勇兼備の方々でありました。

偖て此の勇氣の原因い何であるかと云ふ事をしらべて見度いと思ひ升。古より今日まで勇氣ある人と云ふ人を見るに大概は死を恐れない處の人で御座り升。人は誰でも死する事を嫌ひます、口では「死すとも止めず」。「死を決して進む」などと申しましてもマサカの時には隨分氣を落し腰を抜かす人も多いので人の笑草になつて居るではありませんか。そこで死を恐れぬと云ふ事は隨分六ケ敷い事ではありますが。しかし死を恐れぬ人でなければ決して勇氣ある人となる事が出來ません、勇氣なき人は戰に望んで何の役にも立ちません。軍人にして勇氣なきは恰度蒸氣車にして蒸氣を失つた樣なもの、さてい鹽にして其味を失つた樣のもので御座り升。何の役にも立ちません。されば軍人たるものは死を恐れぬ事をも稽古せねばなりません。勿論軍人が勇氣を養ふには、實際の戰爭に度々望む事

は必要であります、けれども其實際に望む前に心の中に悟り居る事が必要で御座り升。先づ其心膽を鍛ひをく事の要であり升。隨分昔から今日まで生來勇氣の有つた人もありまを、例へバ三國誌にある張飛とか日本の加藤清正とう隨分生來勇氣があつて何も恐れなかつた人もあり升。けれども此れは稀れなる人で、大概落着てスワと云ふ時よ當つて決して狼狽もせず、非常の勇氣を以て事をした人々を見ますれば平常より何か大よ考へて居た人々であります。孔子が陳蔡の間よ大に苦んだる時の如きも、平氣で子路を慰めて「君子はもとより窮す」と云へり、匡に入つて又大よ迷惑をしましたけれども又天を信じて少しも驚きませんで「しさ、凡そ人々が一旦おそろしき事起つても平氣でをる人は孔子の様に何の悟つてをるからです。何も悟らず此世の中はドーユものやら、死んでの後は如何よなるものやら少しも夢中で居る人は、何か恐ろしき事が起ればじきよ狼狽して平常の大言も法螺も吹く處ではない「生命あつてのもの種だなと云つて」逸先に何處ゟへ逃げ出しまうものであり升。それ故に是非とも眞正の勇氣ある人とならんとせば、平常死の事や人間の生命の事あどを十分考いて悟つて居ちねばありません。

若し人非常の勇者とならんとせバ「死すると云ふ事は如何なる事」「死んでから後は如何なるもの」なと凡てこの死と

云ふ事に付て十分知りて悟りて居らねばありません。死んでから「焔魔大王」と云ふ實に恐しき大王の裁判を受けねばならぬものですか。又火の車に乗らねばならぬものですか。劍の山を洗足で登らねばならぬものですか。又は極樂淨土と云ふはあるものですか、黄金の蓮い常に薫り天女は樂を奏していとも面白く限なく樂しむ處があるのでそか。將た又そんな事は少しもなく死んでから後は「空」に歸するものですか。又永遠に生きて居るものですか。此等の事に付て十分に知るか悟るか信ずるかをしてをらなければならぬ時に必ず狼狽し大切の場合に腰を抜かす、死なねばならぬ時に卑怯未錬の事をして己の名譽斗りでなく父母の名をも汚し、さては國家の御用にたゝぬ樣になります。それ故に軍人たるものは平常「死」と云ふ事に付て十分考へてをかねばならぬ事と思ます。

皆樣も御存じの通り亞米利加の父と呼ばれますワシントンは智勇兼備の名將でありました。誠に弱い兵隊を以て最も錬り上げたる英國の兵隊と一年二年でなく三年も四年も七年も少しも屈せず。兵隊が少なくなるも味方は段々死んでしまうもかまはず、強き英國の兵と戰かつた事を見ても、決して尋常の大將でありません。非常に勇氣のあつた人で、且つは少しも恐ろしい事を知らぬ大將でありました、何故にワシントンはてんなに何も恐ろしふ思はずに

最も勇ましく戰つたのであります。それには色々の譯もありましたろう。一体生來勇氣のあつた處もありましたろう、併しワシントンは基督信者でありました。それ故に死と云ふ事に付ては十分悟つて居る處がございます。ろこが第一にワシントンをして勇ましく戰はしめた譯で御座ります。一体「キリスト」信者と云ふものは死と云ふ事に付ては如何に思つて居るのでありますか。そこが私の今諸君に御話し致し度事で御座ります。「キリスト」信者が死と云ふ事に付ては色々に悟つて居ります。第一私共の靈魂と云ふものは決して滅ならぬもの即ち私共は限なく生きて居るものと信じて居ります。此の限なく生きて居ると信じて居る事は萬般の事の上に大なる關係があります。人間今日の一行一動に大なる關係があります。若しも人間は此世限りのものならば泥朴でも人殺しでも勝手氣儘の事をする方がいゝのです、若しも人間は此の短き世限りでなくなつてしまうものならば「エピキュリアン」の人々の如く飲めよ食へよ明日は死ぬるべければなると云つて、放蕩に飲食酒色に耽る方が餘程利功です。此世斗りのものならば唯此世を樂しく面白く氣儘に暮す方が餘程賢こいのです。人間と云ふものは此世限りにして三寸息絶ゆる時は萬事空しくなるものであるとする時は、人々の心得人々の日々の行爲以上述べた樣な變つて參ります。しかし人間と云ふものは

此世限りでなく永く生きて居るものである、未來と云ふものゝあるもので誰れ彼の區別なく終りの日には審判を受けねばならぬものであると云ふ樣になると人々は決して飲食斗りゝ此日を送くつて居る事が出來ません。出來丈力を盡して立派な行爲と立派な言葉と立派な心得ゝならねばならぬ樣ゝなつて參り升。誠ゝ此の人間が死んでから後で永く生きてあると云ふと又死んでしまへばられぎりであると云ふとによつて人の行爲に大變化を來らすものですから、此の靈魂未滅即人間は永らく生きて居ると云ふ事は人間行爲萬般の上ゝ大なる關係があると云ふ事が分ります。

この靈魂未滅即ち人間は死んでから後もで永く生きてあると云ふ事ゝ殊ゝ軍人諸君と大關係を有してをるものです。如何とおれば軍人諸君は當り前の人々よりは實際屢々死生の間を往來して居りますから、死と云ふ問題を悟つて居ると居らぬとゝよつて平常でも又戰爭の場合でも其行爲に大なる變化を來らすもので御座り升。若しも人間と云ふものゝ此の肉体が傷んでも又殺されても靈魂は永く生きて居ると云ふ事が分つたならば、必ず諸君ゝ勇んで戰爭する樣になつて決して死ぬるおそゝ云ふ事我少しも恐れず却て喜ばしき事となりませうマホメットト信者ゝ戰爭に於て最も勇ましく戰い升。何故と云ふに確く未來を

信じ戰爭の爲に死んだものゝ必ず未來に往いて樂しみを思の儘にせらるゝものであると思つて居るからです。實に此の未來即ち人間ゝ此世限りでなく永く生きて居るものゝで有と云ふ事は軍人の勇怯に大關係があるものです。「キリスト」教ゝ矢張り未來を教へ升。人間は此世限りでありと教へます。「キリスト」信者ゝ未來を信じて居る事決してマホメット信者と劣りません。劣りませんから信者たる軍人が戰爭する時は勇ましく戰ひ升。ワシントンは其一例です獨りワシントン斗りでありませんグラントもろうでありました獨りグラント斗りでありません、フレデリト大王も實に「キリスト」信者で確實なる信仰を持つてをる人でした。人間ゝ此世斗りでないと信じて居る人は戰爭ゝ於て落着いて果斷ゝ沈毅に單一に勇猛ゝ疾風迅雷の如く義の爲に戰つて死ぬる事などを恐れません。死ぬる事などはもと來た故鄉の家にでも歸る樣な心地して決して恐れるなどの事ゝありません。それ故に十分に戰ふ事が出來升。戰ふ事が出來る即ち軍人たるの務を戰爭に臨んで十分に盡す事が出來ます。されば軍人諸君は人としてもキリスト」教を信せねばならぬ斗りでなく軍人としても信せねばならぬ譯合が分つて參りませう。

次に御談し致し度は「膽力」の事です先つ軍人が戰に望んで勇ましく戰ひ拔群の功をあらはして國家の爲に盡さんに

は死と云ふ事に就て確かに悟つて居ればスワと云ふ時には十分に役に立ちます。次に必要なのゝ何です即ち膽力です。古より今日までのエライ軍人を御覽なさい何れも能く戰ひ能く敵を制服し能く勇氣をあらはしました。何せであるうと云ふに一ッは死と云ふ事に付て明かに悟つてをりましたが又一ッにゝ膽力を平常から能く練つた人々であつさからであります。凡そ昔から今日までエライ事をした人ゝ獨り軍人斗りでなく皆膽力を練つてあつた膽力家でありました。エライ事をするには必ず膽力と云ふものゝ必要なものに相違ありません。御覽なさい孔子でも孟子でもルーテルでもノックスも皆々絶世の大人物で百代の師表と仰がるゝ人でありませう。然るに彼等は何れも正義と道の爲には其死する事もせめらるゝ事も誹らるゝ事も迫害せらるゝ事も何でも平氣でありました。それであるから彼れほどの大事業をなしたれでありヤ。孔孟は支那道法界の大人物で。ルーテルノックスは歐州宗教界の大人物で共に皆百世の師表であり升。彼等は屢々危いめにそつらいめにも食はざる事も殺さるゝめにも迫害せらるゝ事にもあいました。然るに彼等は依然ある一片の赤誠を滿天下に發表して少しも恐れ憚る處なく運命を天に任せ平然として少しも迫りたる氣色はない斗りであく却て殺されんとする場合にまで望むべき價値あるを

眞の心の底より喜んで居りました。況んや恐るゝなどの事は露程も有ませんでした。何せと云ふに一言に申せば彼等は膽力家であつたからであります。勿論彼等とても人でありますから殺さるゝ事も攻めらるゝ事も誹らるゝ事も嫌であるに違いないのでそが。然るに通常の人と違つて此んな場合に平然たるものは其中に何をも恐をぬ膽力が十分練れてあつたからです。

この通り凡そ世の中に大事をなした程の人は必ず十分の膽力を錬り上げて膽力家となつた人でありました。然るに軍人は殊に膽力家でなければ戰爭は於ては十分戰ふて大勝利を得る事が出來ません。これは只今改めて申すにも及ばぬ事であり升。軍人の傳記や、其外大戰爭の歷史などを御讀みなされば其事は明らに分つて參ります。御覽あさい今日の山路將軍の如きさては野津大將の如きは如何なる方々でありますう。もとよりあの方々を色々の方面より見る事が出來ますが。膽力家と云ふもあの方々の一特質で御座りませう。獨り此の方々斗りでありません昔から今日まで有名なる大將は凡て膽力家でありました

ナポレオンもワシントンも歷山もハンニバルもタメルランも小早川高景も秀吉も皆な盡く膽力家でありました。戰爭の勝敗は時の遲速と物の多少と物の强弱など器械的の事に關する事誠に大なるものありと雖も、士氣即ち軍人

の精神に關する事誠に大なるものある事は實戰に度々臨みたる軍人諸君の明かに知る處でありませう。士氣の中果斷と云へ單一と云へ戰爭上最も大切なる精神上の働きあれど果斷と云へ單一と云へ此等のものゝ基をますものは膽力であり升。先つ膽力と云ふもの確固と軍人の精神の中に備つて始めて果斷と云ふ働ともなり、單一と云ふ考も持たれ、突進と云ふ事も出來、疾風迅雷の働も靜かなる事林の如き靜姿を取る事も出來るものであり升。膽力我が中に十分備はらずして唯勇しく戰はんとするは所謂野猪の勇にして唯肉体の力、動物的の力によりすがつて働くものなれば永く續くものではありません。又正しく明かに成行きを見ながら殺そべきものを殺し、助くべきものを助け、なそべらざる事をなさずして唯正になそべき事のみをなす事が出來ません、長く續けて働く事も出來ず。又正しく戰をなす事も出來ぬならば、モー正しき人間が戰爭をなすものにもあらず。又碌なる戰爭は出來ぬものであり升。昔から今日まで大戰爭に於て大勝利を得し人々を見るに皆彈丸雨の如く來り突進殺傷互に相當るの間に悠然として平氣で卷烟草でもくゝらし或は談笑自在なるが如きいとも落着きたる處のあつた人々であります。此故に軍人とありて軍人たるの任務を十分に盡さんとせば膽力を練る事が實に必要であります。それ臆病なる人と雖ども膽

力を養ふ時ハ隨分エライ膽力家となれます。昔から其例が隨分あります。日本の歴史にも歐州諸國の歴史にも支那の歴史にも澤山其例が見へます。されバどなたも如何なる人も膽力を練る樣に心を用いねばならぬと思はれます。我は生來臆病であると云つてその臆病で滿足してをつてはいけません、力を盡して出來る丈勇者となる工夫、膽力家となる事をせねばなりません、此れが軍人たるものゝ先つ勉むべき課業の一つであります。器械躰操をしたり射的演習をしたりするのハ軍人の勉むべき課業にハ相違ありませんが其れと同時に此の器械にて稽古したる事を十分使ふ丈け氣力がなければなりません。士氣即ち此の軍人の氣性の中で大切なるものは先つ膽力であります。膽力ハ鐵砲も大砲も刀劍も自由に使用致します。膽力なければ正宗の刀ありとも之を用ひて敵の首をきり落す事が出來ません、膽力あつて而して後に此の刀も鐵砲も始めて役に立つものであり升。それ故に膽力を練る事ハ軍人たるものゝ勉むべき課業の一つに相違ありません。それ故に軍人諸君ハ十分力を用ひて膽力を練る樣に心掛けなさるとを御勸め致します。

さらば其膽力を養成するには如何したらいゝでせうゝ。これ余が次に御談し申さんとする問題であり升。此は軍人諸君に取つては隨分大切なる問題であります。軍人諸

君に膽力が必要あるが故に其養成法い實に必要ある問題であります。さて膽力を養ふには色々方法があります。其方法は一人々々別々の方法があり升。人によつて異あるものであります。それ故に此の方法がよいと云ふ一定の方法がないのです、隨分禪宗の如き意志を練る事を稽古する宗敎では坐禪を組み思を沈め物界より離れ。丹田我練りて以て非常なる膽力家とあつたるものもありますが併しながら其發達の有様を見るにドーモ變です。何とあく嫌らしい所があり升。何となく自然でない處があります。唯不自然な斗りでなくスワと云ふ時は實際の役にたちません、如何となれば彼の坐禪は唯心で沈思熟考して宇宙の大眞理を攻究するものなれば實際に遠ゝり實際を離れて空想に走り。空想では隨分天地を呑んだ樣に思つて居ても針程の實際世界の事を處理そる事が出來ません。實際世界の事に當りて閉口して居るのみならず、彼等は閉口の餘り此の實際世界を輕んずるゝら結局此世界を破壞するものであります。若し此の世界中の人々を盡く禪座にすはらして坐禪せしめしならば此世界の人々は盡く不活潑になり、不動になり、此世界萬般の運動は止まりまそ。色々の点より考ふるゝ此坐禪と云ふものは畢竟人世に害を與ふるのみにして利益を人に與へぬものと云ふてよからうと思はれます、よし坐禪をくんだ高僧で膽力家と稱そる

人も實際の役にはたゝねば先つ此の活潑なる時代の十九世紀に於て活潑なる仕事をおして多くの人々よ打勝たんとせば須らく此んな死んだ方法によりて以て膽力を練る樣な事は止めねばならぬ事と思はれ升。坐禪斗りでなく其他隨分澤山の方法がありますけれども坐禪と等しく或人よ適當するかも知れませんが又或時代よ適當するかもしれません、けれども又或る度まで發達する事が出來ませうゞ併し天然自然人々萬人がよつて以て膽力を養ふ事が出來ないから唯膽力を練るの精神を養ふのが一番賢い事と思升。

余は今より先輩諸氏が實驗して余等に敎へたる膽力を練るの精神を御話し致しませう。膽力とは何の事でありますか。何でも恐れない事即ち凡ての事は恐ろしくないと云ふ心で御座りませう。何でも恐ろしくないと云ふならば死ぬる事も戰爭も射放ち大砲の筒先きでも彈丸雨の如くふり來る眞中でも恐ろしくない事でせう。そこで始めて立派な戰爭が出來ませう。それ故よ凡そ軍人たるものは膽力家でなければならぬと云ふのです。

それで只今私はどうゆう仕方で皆さんか膽力家になられますと云ふ事を御話し致す積りでおくどうゆふ精神になれば膽力家になれるやと云ふ事で御座ります。隨分昔しの賢明なる人或は偉大なる人傑は色々と考へて、色々の悟

を開て居て、色々ある精神よりあつて落着いたる膽力家になつたのでありまそが。先つ凡ての人々がドーシテも心よ思つて居た事は、身を棄て、こそ浮ぶ瀬もあれ」と云ふ歌の精神で御座ります。此れは武道の奥儀で御座り升。凡ての事此のドン底まで思切つて居れば決して恐ろしいの又は心配だなと云ふ事はないのでそ。此事は澤奄和尚も柳生先生よ教へて居りまそ。柳生先生があの通り劒道の奥儀よ達したのも此の秘傳を澤奄和尚から授かつたからでありまそ。その前までは柳生先生も矢張り當り前の劒容の様よ唯方法斗り考へて居りました。唯受け流す事や、撃ち込む、事などの、末技に汲々として骨を折つて居りました

一旦此の精神を和尚より授かりてからは丸で別の先生にありました。即ち膽力家の精神が備つたからモー誰にも恐るゝ處はありません、何も恐ろしい事はありません。撃たれても、突かれても否な殺されても何にも恐ろしい事がありません、モー天地を呑んでをります、天地を呑んで居る人ですら少き人間等が幾何騒いでも何でもありません。併しこれ丈けでは未だ足りません、これで充分でありません、何となく不足な様な心地致します。そこで基督教的よ膽力を練る事を御話ー致さねばなりません。基督教では凡ての事神の御心による事と教へます。死ぬる事も生きる事も何でも神の御心による事と教へまそ。神の御許し

なければ一羽の雀すら地に落す。一條の髪の毛すら白くも黑くも人間がする事が出來ぬと敎へてあります。而して神樣が人間に御許しあさる事は飽まで人間の爲にはよい事であつて神は決して人々を惡しきに導き玉はずと敎へてあります。こゝが外の人々の悟つた處よりも勝つた點で御座ります。思切りて身を棄てた處が浮ばぬ事もあります。必ず浮ぶ即ち生命はないものと覺悟して戰爭に臨んでそうして勝たずして遂に敵に殺さるゝ樣な事が御座り升。何時でも身を棄てた處が浮ぶと云ふ事に極つてをりません、實にこれ危ぶない事、不安心の事です。然るに基督敎では何事でも神の御心の儘になるものにして、私共が勝手氣儘にあらぬ事で。萬てのものは神の支配を免るゝ事はないと信じて而して其凡ての事い皆な神の慈愛心より起る事で人間には極よい事であると信ドてをります から、安心です。モー何も心配するに及びません、私共今此の戰場に臨んで死ぬるも生きるも皆神の御心の中にある事で。死んた處がそれが實に我が爲に幸福な事だと確信して居れば實に落着いてユツクリして戰場に臨んでをられます。死ぬる事も急がす。又死ぬるも恐れず所謂從容自着として人々が面色土の如き有樣になつて恐れて居る最中にも平氣で安心して正しき心を以て已のあすべき事をあしてをられます。此れが即ち眞正の膽力家であります

す。死を恐れぬとか何とか云つて肩を張つて居るうちは未だほんとうの膽力家と云ふに足りません。眞正の膽力家は恐ろしい恐ろしくないと云ふ事などは心の中に起らぬものであります。モー此の恐ろしいの恐ろしくないのと云ふ處より百丈も千丈も上に上つて居るものであります。此れが眞正の膽力家として基督信者が練り上くる時はこの點まで練り上ります。これ即ち基督信徒が膽を練る方法のよんのでなく其精神がよいのであります。其精神とは別事でなく即ち神を生きて慈愛ある。天の父と信ずる事であります。又人間の運命。人間の死生。人間の苦樂。など萬事神の御意の中にある事を確く信ずる事です。神を生きて慈愛なる父と信じ而して人間の萬事は凡て神の御心より出つるものなりと信ずる時は如何なる場合にも滿足して喜んで其時と場所に處する事が出來ます即ち艱難にも迫害にも貧窮にも、疾病にも、戰爭にも、死亡にも、如何なる場合にも平氣で少しも驚かず。騷がず。泰然として恰も夏雨一通の夕浴後霽月を眺めて左團扇にて自由なる談話を自由なすが如く氣も心も全体も何にも束縛せらるゝ事なくして夕涼するが如き、心を始終保つ事が出來ます。嗚呼實に愉快なる事でありませんか。凡での場合に斯の如き心を持たれ得ば、軍人たるもの須らく基督教を信じなされば如何で御座ります。唯飲はず嫌いでは

いけません。唯男兒たるものは愈惡るい事と知つた事でなければ之を嫌ふべきものではないと思ひ升。基督敎が惡るいからよいか未た手ゝ取つて調べて見ない中ゝ食はず嫌では大和魂を持つた日本男兒でないと思ひ升。謹んて軍人諸君ゝ基督敎を調べて信仰せられん事を御勸め致し升。

いけませぬ。唯男兒たるものは愈惡るい事と知つた事でなければ之を嫌ふべきものではないと思ひ升。基督教が惡るいゝよいか未だ手ゐ取つて調べて見ない中ゐ食はず嫌では大和魂を持つた日本男兒でないと思ひ升。謹んで軍人諸君ゐ基督教を調べて信仰せられん事を御勸め致し升。

明治二十八年五月卅一日印刷
明治二十八年六月六日發行
（定價金九錢）

著述者一　東京麹町區富士見町二丁目卅三番地　島貫兵太夫

發行者　福島縣中村町　吉田龜太郎

印刷者　東京々橋區南小田原町一丁目七番地　高坂駒重

發行所　東京麺町區富士見町二丁目卅三番地　救世社

印刷所　東京々橋區南小田原町一丁目七番地　新榮堂

廣告

救世 第二號 目次

◉社說
本紙の本領を明かす　再び本紙の本領を明かす

◉傳道
各孤宜しく人物を收纏すべし　先輩を論す　貧民傳道　平民的の傳道法　傳道者の胸中を論す　朝鮮の基督教意志的運動の必要を論す　狹隘固陋の俗心を駁す　日本の傳道（一）　日本の傳道（二）　宗教と學　軍人傳道を論す

◉教會
教會音樂（續）

◉教育
女子大學設立　朝鮮教育　朝鮮教育神學校を論す

森愛軒
福田錠二
慷慨生
阿部能文
酒井美祿
姜琪熙
高義駿

救世 第三號 目次

◉傳道
戰後の傳道論　日本傳道　外國傳道要論　傳道會社　東洋傳道會社　宗教と思想の自由と　新領地傳道　金州半島　內國傳道　臺灣神學校を論す（承前）　清國の宗教　專門傳道如何

三上久滿三
渡瀨常吉
中村長之介
菅田勇太郎
岡南漁夫
增子喜一郎
上山榮

◉教會
教會音樂　會堂建築

酒井美祿

◉評論
青年文學雜誌、共勵雜誌、道のしを、聖書之友、反省會雜誌、明教新誌、北海之光、岡山基督教、精神、日曜叢誌、東北文學、不知火、教界評論、濟民、青山評論、禁酒界、「救世」に對する各新聞雜誌の批評數件等

◉寄書
傳道と私塾

至微天囚生

一部四錢　郵稅不要

東京市麴町區富士見町二丁目卅三番地
發行所　救世社

特61

270

軍人と基督教

島貫兵太夫

禁複写

国立国会図書館

020605-000-7

特61-270

軍人と基督教

島貫　兵太夫／著

M28

ABI-0420